人のいる風景 people

後藤 幸夫さん

ごとう・ゆきお

手作り木製工芸品の本当の魅力
「クラフトは物作りにあらず、人とのつながりを作る。」

10月14日、15日の土日の2日間、ちとせモールで『第11回クラフトフェア』が開催されます。会場には、木でできた等身大の戦車やバイクなどが展示され、実際に手で触れて遊ぶことができます。

製作者の1人であり、クラフトフェアの主催者でもある後藤幸夫さん。自衛官退職後、職業としての芸術作家や団体役員ではなく、あくまで《趣味を楽しむ人》であり続けたいと話す後藤さんにお会いしてきました。

●木で物を作ることに魅力を感じたのはいつごろからですか

「幼少のころ、新冠町の、周囲にお店のない山の中で暮らしていまして、山仕事をする父親が木材で作った生活用具に囲まれて日々を過ごしました。毎年、板スキーや釣り竿などの遊具を作ってくれたので、その温かみというか…、気がつけば、木の手作りの物が好きになっていました。

昭和46年に千歳に家を建てたころ、とある年末謝恩感謝祭で10万円が当たったのです。妻は貯金にといったのですが、物作りに生かすために大工道具一式を手に入れました。きちんとした物作りはそれからですかね。」

●退職後、クラフトフェアの開催など精力的に活動を始めていますね

「部隊でも若いころから、ナタ、切り出しナイフと彫刻刀は持ち歩いていました。30年ほど前に演習場に転がっている木の枝で、小さなスプーンを作ったのですが、妻に頼まれて、奈良市に住む妻の友人に贈ったのです。

その後、退職した平成17年に、夫婦で奈良の友人宅を訪れたのですが、コーヒーと一緒にテーブルに出された砂糖入れに、あのときのスプーンがついていたのです。真っ黒に黒ずんだスプーンを手に取り、「もしやこれは私が…」と尋ねると、「ずっと使わせてもらっていますよ」の言葉が。今では恥ずかしい出来映えですが、その再会の喜びといったら、例えようがありませんでした。

人の手に渡ることの楽しみ、いつか自分の作品たちと再会できるかもしれないという期待感、同じクラフト仲間と集い、趣味を分かち合いながら、時には作品を譲り合う喜び。それが、今回で6年・11回目となるクラフトフェアを続けてきた原動力だと思います。物作りにあらず、人とのつながりを作っているのだと…」

●クラフトフェアの今後の展開は？

「フェアも続きますが、今の夢は、廃校となった学校や、青葉公園などの自然の中でできる大型イベントの構想を練っているところです。工芸品だけではなく、音楽や絵など、「手作り（クラフト）」が集うイベントを、あのころの新冠の山の中のような自然に囲まれた場所で開催したいですね。

お店で買ってきた出来合いの物を作るのではない、本当の手作りの喜びと、それを通じて広がる人とのつながりを、今の子どもや大人たちに、ぜひ楽しんでもらいたいのです。」

今の自分の技術は、大勢のクラフト仲間たちに教えてもらったこと、職場の同僚の理解、寄り添う妻の気持ちがあったから、自分一人で培ったものではないと語る後藤さん。

作品作りに、一人、前のめりに向き合いつつも、人との交流を大切に活動の視野を広げる後藤さんの姿は、作品の木目に現れる年輪のように重層的で深みがあります。

◀木でできた実物の2分の1サイズの《87式偵察警戒車》。安全なゴム玉の射出までする。

▼スプーン、まな板から華道で使う花器などの数々の作品。

プロフィール

■後藤 幸夫（ごとう ゆきお）さん／弥生在住／自宅併設の工房「悠楽」などで、数多くの木製工芸品を製作する。／二級建築士の資格を有し、工房を自ら建築したほか、ノミなどの工具から木材を削る機械（写真）までも自作する。／イベントの詳細 ☎090(9759)6713